

# 隠喩と提喩の境界事例について

森 雄 一

## 1

比喩が関わった具体的な事例の分析において、隠喩（メタファー）と提喩（シネクドキー）のどちらによるものか、判断に迷うことがある。たとえば、『ヒラリーをさがせ！』という書物<sup>(注1)</sup>のタイトルに用いられている「ヒラリー（・クリントン）」は、隠喩なのだろうか、提喩なのだろうか。「舵をとる」という慣用句は、〈船頭が舵をとる〉ということから〈船頭が船を進める〉という意味になる過程については、換喩（メトニミー）が関わっていることに異論はないと考えられるが、そこから、〈物事をうまく進める〉という意味になった場合、隠喩と換喩のどちらが関係していると考えたらよいのだろうか。後者の現象については、比喩の複合を扱った重要な研究である初山（1997）と笠貫（2002）でも、前者は隠喩、後者は提喩と判断が分かれている。

本稿では、このような隠喩と提喩のどちらが関わっているか判断がつきにくい事象を、慣用句・ことわざ・人を表す固有名詞の三つのカテゴリーにおいて考察を進め、隠喩と提喩の区別を論じるとともに、その区別がきわめて難しい場合、隠喩と提喩の境界事例について示すことを目的とする。慣用句・ことわざにおいては、慣用句的意味に定着するプロセスにおいて隠喩と提喩のどちらが関わるのか紛れる現象があるのに対し、人を表す固有名詞においては、慣用的意味に定着していない場合もあるので異なった分析が必要となる。本稿は、この三つの領域にとどまるが、隠喩と提喩の関わり全体を考究するための予備的な考察と位置づけられるものである<sup>(注2)</sup>。

以下、2節では上述の初山（1997）と笠貫（2002）を承け、隠喩と換喩の規定について論じる。3節では慣用句、4節ではことわざ、5節では人を表す固有名詞に現れる隠喩と提喩の境界事例について考察し、6節では議論のまとめと今後の課題を述べる。

---

注1 横田由美子著、文春新書、2008年刊行。

注2 森（2002）（2003）（2007）では、隠喩は、提喩が二重になったものだとする説に対する稿者の考え方を述べるとともに、隠喩と提喩の親近性についても論じた。本稿は、その諸論とも統合され、隠喩と提喩の関わり全体の像をとらえるためのステップとなるものである。

## 2

上述の初山（1997）と笠貫（2002）における「舵をとる」の扱い方の違いは、本稿のテーマにとって重要なポイントであるが、その検討を行う前に、両者の隠喩と提喩の規定を確認し、稿者の見解を示さなければならない。

初山（1997）では、隠喩と提喩をそれぞれ次のように規定している。

隠喩：二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。（初山 1997：30）

提喩：より一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆により特殊な意味を持つ形式を用いて、より一般的な意味を表すという比喩。（初山 1997：30）

笠貫（2002：105）では、隠喩（メタファー）については次のように規定している。

メタファーとは、抽象的な対象を理解する際、それとは別の具体的な認知領域における要素を写像することによって捉える手段であり、二つの認知領域が関わる。

提喩については、換喩（メトニミー）の定義を示すなかで「〔類一種（上位カテゴリー—下位カテゴリー）〕として別に扱うこととする」（笠貫 2002：106）としているが、その規定に関しては初山とほぼ同一の見解と見てよいであろう。問題は、伝統的な隠喩論と認知言語学以後の隠喩論の違いといってもよい隠喩における規定の相違である。

稿者は、この二つの規定について、同一の事象を違った側面から述べたものと考えられる。つまり、初山（1997）のいう、類似性をもとにした比喩というのは、二つの認知領域（ドメイン）を結ぶ、「基盤」に焦点をあてたい方であるのに対し、笠貫（2002）では、「基盤」については明示せず、二つの認知領域間の写像（転移、マッピング）に焦点があてられている。もちろん、この二つの規定には長短がそれぞれある。単発の隠喩の場合は、認知領域というのが浮き出しにくく類似性に焦点をあてることになろう。また、「気持を汲む」「愛情を注ぐ」といった概念メタファーの場合には、類似性が希薄であり、それを基盤とした規定を前面に出すよりも、認知領域間のマッピングという規定の方がふさわしいと考えられる。なお、笠貫（2002）においては、「これまでメタファーの成立する前提として考えられることの多かった「類似性」は、もともと客観的に存在するのではなく、この写像により両領域間に「つくられる」と捉えられる」（笠貫 2002：105）とあるが、この点

については稿を改めて論じたい<sup>(注3)</sup>。

3節以降の考察において、隠喩と提喩を区別するにあたっては、別の認知領域間の転移なのか、包含するカテゴリー間の転移なのかという観点が有用であるので、認知領域間のマッピングという隠喩規定を使用することとする。

### 3

初山（1997）では、慣用句の意味の成立を比喩的な観点から考察している。隠喩に基づくときれ説明が加えられているのは、「足を洗う」で、〈足の汚れを水で落とす〉と〈好ましくない仕事・行為等を止める〉の類似性に基づくときれる。〈足の汚れ〉と〈好ましくない仕事〉は異なる認知領域に属するものなので、隠喩と解釈される。提喩に基づくときれ説明が加えられているのは、「煮え湯を飲ませる」で〈煮え湯を飲ませる〉と〈ひどい目に合わせる〉の上位一下位カテゴリー関係に基づくときれる。〈煮え湯を飲ませる〉ということが、〈ひどい目に合わせる〉ということの一種であることには問題はないであろう。この2例を見る限り、隠喩と提喩の関わりは明瞭に区別できるように思われる。しかしながら、どちらに振り分けるか判断に迷う例も存在する。例えば、初山（1997）で、「足を引っ張る」は、隠喩に基づくときれされている。しかしながら、〈人の行動の邪魔をする〉ということの一種が〈足を引っ張って邪魔をする〉ということであると解すれば、換喩と提喩が重なった事例としても分析できる。提喩が関わると解された「氷山の一角」において、〈たまたま表面に現れた、大きな物事のほんの一部〉という慣用的意味と字義通りの意味である〈氷山の一角〉は、上位カテゴリー—下位カテゴリーの関係に一見なっている。しかしながら、現実の言語使用として、この表現が適用されるのは抽象的な事態の場合が多く、具体物と抽象的事物という認知領域間のマッピングが起きたともとらえることができる。「足を引っ張る」とともに「氷山の一角」は隠喩と提喩の境界事例、どのように意味記述をするかによってどちらが適用できるかが揺れる例であると考えられる。適用範囲がずれていると考えられる場合、隠喩ととらえられ、字義通りの意味が慣用的意味の中に入れられると考えられる場合に提喩ととらえられるのである。

さて、1節で導入として用いた「舵をとる」である。初山（1997）では換喩に隠喩が組み合わさったタイプの例としてあげられているもので、〈舵を手にとる〉という字義通りの行為に続いて〈舵を操作して船を進める〉ということがまず成り立つときれる。これは時間の前後関係による換喩である。ついで、〈舵を操作して船

---

注3 初山・深田（2003：76）においても、初山（1997）と同一の隠喩の規定が記されるとともに、「[類似性に基づく]というのは、2つの事物・概念に類似性が内在しているというよりも、人間が2つの対象の間に主体的に類似性を見出すことを表していると考えた方が適切である。」と述べられている。

を進める」と〈物事をうまく進める〉との間は隠喩に基づいて拡張しているとされる。一方、笠貫（2002）では、「舵をとる」を含めた諸例<sup>(注4)</sup>について次のように述べている。

記述の具体例を見てもわかる通り、「メトニミーからのメタファー」が指示するのは、メトニミー基盤における指示対象が一般化した広い範囲の対象であり、上位カテゴリーに相当する。（中略）ここで指示対象がメトニミー基盤での指示対象からその上位カテゴリーに拡大し得るのは、下位カテゴリーが上位カテゴリーを指示するシネドキシの働きによると考えるのが自然である。（笠貫 2002：108）

何故、このような分析の違いが生じたのか。〈舵を操作して船を進める〉と〈物事をうまく進める〉の間には、上位カテゴリー—下位カテゴリーの関係が成立していると言える、その面では、これは提喩である。しかしながら、現実の言語使用としては、「プロジェクトの舵をとる」、「会の運営の舵をとる」のように集団を導く場合が多く、これは「航海（船の操作）」という認知領域から「人間の集団（を指導する）」という領域へのマッピングが起きていると考えられ、その面では、隠喩といえる。それでは慣用的意味の規定として、〈物事をうまく進める〉ではなく、〈人間の集団を指導する〉を用いればよいかというと、この慣用語の使用の拡がりやうまくとらえられていない。たとえば、「自分の人生の舵をとる」のような表現は使用例としては周辺的なものとしてだが、許容されるように思われる。典型例だけを考えれば、隠喩となるのであるが、用法の適用範囲を拡げて考えれば、提喩となる、その意味で「足を引っ張る」「氷山の一角」同様に、隠喩と提喩の境界事例をなす場合といえるだろう。

#### 4

本節では、ことわざに見られる隠喩と提喩の境界事例を扱う。多門（2005）では、ことわざについて「典型例タイプ」（例：猿も木から落ちる）と「字義通りタイプ」（例：老いては子に従え）に分類し、前者を「提喩」の一種だと言うこともできる」（多門 2005：138）としている<sup>(注5)</sup>。また、武田（1992）では、提喩型のことわざについて種（下位カテゴリー）で類（上位カテゴリー）を表すものと類で種を表すものの双方について多くの例を示しているが、隠喩型のことわざについては、

---

注4 他には、「to applaud」（＝「to express strong agreement」）、「筆をとる」（＝「書く」）、「蔵を建てる」（＝「裕福になる」）などの例があげられている。

注5 また、多門（2005）では「千里の道も一歩から」、「急がば回れ」のように「典型例タイプ」と「字義通りタイプ」の区別がつきにくくなっている興味深い諸例をあげている。

「ことわざにかぎっていえば、この比喩形式をもつものは多くはない」（武田 1992: 143）と述べた上で、具体的にあげられているのは、「時は金なり」「秋の日はつるべ落とし」「言わぬが花」のように、「A は（が）B」というタイプに限定されている。このような記述を見ると、ことわざには、隠喩タイプはあまり見られないととらえられているのが現状であると判断される<sup>(注6)</sup>。しかしながら、次のようなものは隠喩タイプのことわざであると稿者は考える。

- (1) a. 鼯<sup>いたち</sup>のなき間の貂<sup>てん</sup>ほこり/虎の威を借る狐/蛙の子は蛙/麒麟も老いては駕馬に劣る  
b. 焼け木杭には火がつきやすい

(1) a は、明らかに動物ドメイン（認知領域）から、人間ドメインへの転移が起こっていると考えられる。(1) b についても自然界ドメインから人間ドメインへの転移と考えられ、上位カテゴリー—下位カテゴリー間の転移とは解すことはできない。このような諸例を含めて考えても、ことわざにおいて、隠喩と提喩は紛れないようにも思える。しかしながら、(2) の例はどうであろうか。すこしずつ異なったいくつかの表現形式で使われることわざであり、中型以上の国語辞典やことわざ辞典においては記載のあるものである。

- (2) 舟に刻みて剣を求む/舟を刻んで剣を尋ねる/剣を落として舟を刻む

時田 (2000: 533) では、「舟に刻みて剣を求む」の見出しで、A「時勢の移り変りに気づかず、いつまでも古いしきたりに固執する愚かさのたとえ。」B「舟から川の中に剣を落とした者が、落ちた位置を舟端に印をつけて、後から印の下の川底を探したが、舟が動いていたので見つからなかったという。」のように記述されている。時田 (2000) の意味記述では「しきたり」という言葉が使われているので、A の意味記述と B で示される元の状況の認知領域は、明らかにずれていると考えられる。しかしながら「一つの考えにとらわれて多様な条件を考慮しないたとえ。また、保守的で時勢の変化を見ないたとえ」（『学研国語大辞典』第二版・1987、見出しは「舟を刻みて剣を求む」）と意味記述をすれば、元の状況もこのことわざの

---

注6 鍋島 (2002: 185) では、Lakoff & Turner (1989) を受け、「ことわざは「無数の個別的な図式にあてはまる」のであるからどのようなものでも Generic is Specific のスキーマに当てはまると考えられる」と述べている。本稿や多門 (2005)、武田 (1998) がことわざの生成プロセスを問題にしているのに対して、ことわざの適用プロセスについて主として論じていると考えられる。適用プロセスをとりあげれば、鍋島 (2002) が述べるように、すべてのことわざは、Generic is Specific のスキーマにあてはまり、従って、提喩的に使用されていると考えることができる。

意味記述の中に入ってくる。先に、慣用句を題材にして、典型例だけを考えれば、隠喩となるのであるが、用法の適用範囲を拡げて考えれば、提喩となる場合について述べた。この場合もまさにそれがあてはまり、典型的に使用される「人間が昔からのしきたりを愚かにも守って時代の流れについていけない」という状況で記述すれば、川の流れと時の推移との間のマッピングも含め、隠喩となるが、〈一つの考えにとらわれて多様な条件を考慮しないこと〉と述べれば、元の状況を含みこむこともでき、上位カテゴリーと下位カテゴリーの間の転義、即ち提喩ととらえることもできるのである。また、(3)のような使用例は、〈一つの考えにとらわれて、正しい判断ができないこと〉といったところまでにこのことわざを拡大して柔軟に使用していると考えられる。

- (3) 人間のなまなかの思想や論理では、到底その正体をつかめないこと、舟に刻して剣を求むるの類であろう<sup>(注7)</sup>。 (石坂洋次郎「若い人」)

以上に見たように、「舟に刻みて剣を求むる」の類は、意味の記述の仕方・あるいは、とらえ方によって、隠喩とも提喩とも考えることができ、両者の境界事例となっていると言えるのである。

## 5

以上の慣用句、ことわざについての考察を承け、本節では人物を指す固有名詞が関わる現象について扱う。慣用句・ことわざはいずれも、慣用的な意味が固定していたものであり、字義通りの意味と慣用的な意味の間関係が問題であった。ここで扱う固有名詞の場合は、慣用的意味と本来その固有名詞がさしていた人物の関係が問題であり、必ずしも固定化されてはいない。まずは、区別が明瞭な事例を提示する。隠喩が関わった場合として明瞭なのは、外形の類似をもとに付けられたあだ名の場合である。たとえば、クラスメートを有名なタレントと似ているということから「(明石家)さんま」と呼ぶようなケースである。この場合、二つの事物がダイレクトに結ばれているので隠喩と解釈できる。これに対して、提喩が関わった場合として明瞭なのは、「ドンファン」で〈好色な人物〉を指すような場合である。この場合、「ドンファン」から〈好色な人物〉という下位カテゴリーから上位カテゴリーへの転換が起こっているため提喩と判断できる。特定の個人を指して、「あ

---

注7 『日本国語大辞典 第二版』に記載のあった用例である。ちなみに、『日本国語大辞典 第二版』では、「舟に刻みて剣を求む」に対しては、「時勢の移ることを知らず、いたずらに古いしきたりを守ることのたとえ」と隠喩的に語釈を、「剣を落として舟を刻む」に対しては「物事にこだわって事態の変化に応ずる力のないことをたとえていう」と提喩的に語釈をそれぞれ行っていた。

いつはドンファンだ」という場合でも、すでに〈好色な人物〉として転義が起きているあとなので、本来、この固有名詞が指していた架空の人物との間でダイレクトに結ばれているとは考えられない。

さて、1節で示した「ヒラリーを探せ」というケースはどうか。この場合は、〈トップを目指す女性政治家〉として一般化が起きている、すなわち、下位カテゴリーから上位カテゴリーへの転換がすでに起きていると考えられる。多門（2000）で、提喩の事例として取り上げられている「マスオさん」（＝妻方の両親と同居する夫）「冬彦さん」（＝マザーコンプレックスの強い若い男性）などと同様、アドホックカテゴリーに関わる提喩と言える。問題は、この「ヒラリー」を用いて、特定の人物を「日本のヒラリー」と称する場合である。このような例においては、認知領域が別であり、その特定の人物とヒラリー・クリントンとをダイレクトに結んでいるので、隠喩と解釈せざるをえない。「A 女史は日本のヒラリーである」と述べるのはこの場合であろう。しかしながら、「ヒラリー」が〈トップを目指す女性政治家〉の意味になっていると考え、〈日本における、トップを目指す女性政治家〉と解釈すれば提喩ともなる。この場合、「日本のヒラリーを探せ」などという表現を用いることができる。このような「の人名」といった形式で、に特定の認知領域を示し、この人名が本来属している認知領域と区別するような事象においては、隠喩と提喩のどちらかに限定して考えることはできず、境界事例としてしか解釈できないのではないだろうか。

類例としては「平成の漱石」が挙げられるであろう。ある特定の作家を明治大正の一時期に国民の人気作家であった夏目漱石になぞらえて使う表現であるが、明治大正期と平成期という認知領域の違いを持ち、夏目漱石とある特定の作家をダイレクトにマッピングしているので隠喩とも判断できるが、漱石が〈国民の人気作家〉に一般化されているととらえれば提喩となる。隠喩とも提喩とも解釈できる境界的な事例であると言える。

## 6

ここまでの考察を承けて、隠喩と提喩の境界事例について整理してみよう。慣用語においては、「足を引っ張る」「氷山の一角」「舵をとる」の諸例をあげ、ことわざにおいては、「舟に刻みて剣を求む」という例をあげた。いずれも字義通りの意味で指し示す状況と慣用的な意味で指し示す状況が、異なる認知領域の間でのマッピングが行われていると考えるか、慣用的な意味を上位カテゴリー、字義通りの意味を下位カテゴリーと考えるか、慣用的な意味のとらえ方あるいは記述の仕方によって揺れてしまうというケースであった。人を表す固有名詞においては、「日本のヒラリー」「平成の漱石」という例をあげた。こちらは、「日本の」「平成の」と認知領域を限定し、元の領域と差異化しているという点では隠喩と解釈され、「ヒラリー」「漱石」が、その固有名詞が指し示すものから一般化しているという点で

は提喩と解釈される、二義性を持つものとなる。この二つのケースが、隠喩と換喩の境界事例、隠喩と換喩が融ける現象として解釈されるものであった。このような現象は、固有名詞・慣用句・ことわざ以外にもあると予想される。今後の課題として、他の分野における隠喩と提喩の境界事例について事例を検討し、隠喩と提喩の関わり全体の中に位置づける必要があると考えている。

#### 参考文献

- 笠貫葉子 (2002) 「複合的比喩の認知的基盤」 KLS22 号 pp. 105-113
- 武田勝昭 (1992) 『ことわざのレトリック』 海鳴社
- 鍋島弘治朗 (2002) 「Generic is Specific はメタファーか—慣用句の理解モデルによる検証—」  
『日本認知言語学会論文集』 第2巻 pp. 182-191
- 多門靖容 (2000) 「変異・複合タイプ比喩をめぐって」 『愛知学院大学紀要』 第29号 pp. 103-116
- 多門靖容 (2005) 「ことわざ・慣用句」 多門靖容・半沢幹一編 『ケーススタディ日本語の表現』  
おうふう pp. 138-143
- 時田昌瑞 (2000) 『岩波ことわざ辞典』 岩波書店
- 粕山洋介 (1997) 「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に—」  
『名古屋大学国語国文学』 第80号 pp. 29-43
- 粕山洋介 (2002) 『認知意味論のしくみ』 研究社
- 粕山洋介・深田智 (2003) 「意味の拡張」 松本曜編 『認知意味論』 シリーズ認知言語学入門第3  
巻 大修館書店 pp. 73-134
- 森 雄一 (2002) 「隠喩は二重の提喩か？」 『成蹊大学文学部紀要』 第37号 pp. 73-84
- 森 雄一 (2003) 「隠喩・換喩・提喩の関係について」 『日本認知言語学会論文集』 第3号 pp.  
322-325
- 森 雄一 (2007) 「隠喩・提喩・逆隠喩」 楠見孝編 『メタファー研究の最前線』 (ひつじ書房)  
pp. 159-175
- Lakoff, George and M.Turner (1989) *More than cool reason : a field guide to poetic metaphor*  
University of Chicago Press

(もり・ゆういち 本学教授)